

#子育て処方せん



食事や発音治療で改善

「#子育て処方せん」の今回のテーマは、上唇などに裂け目がある状態で生まれてくる「**口唇口蓋裂**」。福岡市立こども病院形成外科長の川上善久医師に、原因や治療法を聞いた。



川上善久医師

口唇口蓋裂

胎児は元々唇やあごが左右に離れており、妊娠初期に顔の中央でくっついてから生まれてくる。この「癒合」がうまくいかなかった場合、上唇から鼻の下にかけてが割れている口唇裂や、口の中の天井部分の「**どちんこ**」がある辺りが裂けて鼻腔とつながっている口蓋裂などの症状が出る。歯茎に割れ目がある場合もあり、顎裂と呼ぶ。

欧米に比べてアジアで多く、日本では約5000人に1人の割合で生まれるとされる。



口唇口蓋裂のイメージ

両方の特性がある場合も

原因は一つではなく、遺伝のほか、母親の喫煙やアルコール摂取、ステロイド剤服用、葉酸不足などが複合的に影響しているとみられている。確実な予防法はないが、葉酸は不足しないよう、食事やサプリメントで適量を補うとよい。治療やリハビリは生まれてから18歳頃までにかけて様々な診療科が連携して行

う。口唇裂の場合、口をすぼめるのに使う筋肉がつかないため、母乳を吸う力が弱くなる。生まれてすぐ、ホッツ床(哺乳床)という矯正装置を口の中に入れる。ミルクを吸う動きを助けるほか、あごの正常な発育を促す効果もある。麻酔が安全に行える生後3〜6か月頃になった



5歳児健診で医師の診察を受ける男児(5月29日、大分県豊後高田市で)

「5歳児健診」に注目 発達障害を早期発見

子どもの発達障害を早期に発見する取り組みとして、「5歳児健診」に注目が集まっている。法律で自治体に義務づけられた健診ではないが、必要に応じて適切な支援につなげることができるため、政府も今年1月から費用の半分を負担する事業を開始。実施を後押ししている。

「どっちが強い?」。5月29日、大分県豊後高田市の複合施設。高田中央病院(豊後高田市)の新納哲男・小児科部長が右手にジャンケンの「パー」、左手に「グー」をつくり、男児(5)に質問した。耳のそばで指を鳴

縫合手術や言語リハビリ

ら、手術で上唇を縫い合わせる。

口蓋裂では、裂け目を縫い合わせるなどの手術を行うのは1歳半前後となる。その頃には簡単な言葉を話すようになる赤ちゃんも増えるが、声を出す時に空気が裂け目から鼻腔に抜けてしまうため、通常の発音を習得できていないケースが多い。手術後、言語聴覚士が聴き取りやすい言葉を話せるよう指導する。

こうした治療やリハビリを続けていけば、食事や発音などの不便はほとんどなくなる。おなかの子どもが口唇口蓋裂との診断を受けても、過度に不安を感じなくて大丈夫だ。

(聞き手 大森祐輔)

らすなどもし、嫌がり方や目線の動きなどで発達障害の可能性を探る。市は就学までに健診の機会を確保しようと2012年12月から5歳児健診を始めた。昨年度の受診率は94・5%に上った。男児の母親で介護福祉士の花水瑛希さん(31)は「普段気付けない部分を知ることができて参考になったし、相談もできて安心した」と語った。

新納部長によると、母子保健法で定められた3歳児までの乳幼児健診では発達にはばらつきがあり、症状の有無が判別しにくい。5歳になる頃には社会性が身に付き始めるため、より判断しやすくなるという。新納部長は「5歳で兆候が見つかれば就学までに時間がある。精密検査や集団生活を送る上での訓練といった必要な手立てにつなげられる」と話す。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール(s-syakal@yomiuri.com)へお願いします。